C—25　家庭経営観念の確立過程から見た江戸期と明治初期の家政論について

東京家政大　　常見　育男

応用科学であり総合科学である家政学は，家庭を建設し経営する上の諸種の問題について，自然科学・社会科学・文化科学からの総合的研究の立場から，家庭生活の物質的・精神的の両方面にわたり，これが設計・調整・管理を目的として，科学的・技術的・倫理的・審美的に研究し，そこに内在する法則性を探究し確立する科学である。

このためには，家庭生活を営為する上の各分野を，それ自体として研究することが基本であるのはいうまでもないが，さらに進んで，「家庭生活を営為するという現象」を，一つの総合体として捉える「家庭経営の観念」の確立がなされなければならない。日本において，家庭生活を「一つの総合体の営み」として捉える「家庭経営の観念の確立」「家庭経営の理念の推移」は，どのような経過をへて，現在に至っているであろうか。

由来，わが国は家を最も重んじ，そのような生活を永く実践してきた歴史をもった民族である。そこには当然家の生活現象を総合的に捉えた，社会教化のための文献も残されている筈である。勿論，社会組織と経済機構は，絶えず進歩してやまないから，過去の家庭経営の観念や理念が，そのまま，現代の家政に妥当しない。

しかし，現代の家庭経営を研究するためには，まず，かつての家庭経営の観念や理念についての史的考察が必要である。この意味から，ここでは，江戸期と明治初期の家政論と思われる。二三の文献について考察してみたい。